私立　同志社大学

●プログラムの名称：地域コミュニティによる学生支援方策
―京町家を拠点にした異世代協同プロジェクト
●プログラム担当者：学生支援センター所長　西村　卓
●キーワード
１．ライフスキル　２．異世代協同　３．地域教育　４．歴史文化の担い手
５．社会の構成員

１．大学の概要

本学は、開学以来「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」を教育理念として掲げ、「良心を手腕に運用する」人物の育成を教育目標としてきている。

現在では学生数約25,000人。３、４年生中心の今出川校地と、１、２年生中心の京田辺校地に分かれており、学生個々人の自律的成長を尊重しながら、「一国の良心」とも言うべき学生の養成のために、「正課、正課外」の枠組みを越えて、各セクションが連携した取組を行っている。

学生支援センターでは、1990年代後半より学生自治組織や学生気質の変化に対応した新機軸の学生支援施策として、課外プログラムの実施、課外活動団体の支援を「個人支援」「集団支援」という概念別に実施してきている。「学生個人の成長」「他者との関係性の構築」「コミュニティを形成していくプロセス」について意識し、大学が学生に対して手取り足取り準備するのではなく、機会を創出し、情報を与え、指導し、励まし、評価し、一般化していくという展開に留意している。

２．本プログラムの概要

本学今出川校地の所在する「京都市上京区」は、有形無形の歴史的・文化的財産に加えて、町内会の自治等、伝統的に強い地域力を有している。その特性を生かし、地域ぐるみで多様な感性の行き交う「学生支援」を行う。学生と市民が運営する町家では、「子ども」「学生」「大人」「高齢者」が出入りし、世代混合のサークル活動や議論の場が展開されるほか、学生が「異世代と協同」しながら、「歴史・文化・伝統産業」等の地域財産を発掘し、現代の生活の中に継承していくことに関わる文化プロジェクトを展開していく。

また、学生が地域コミュニティの住人として町家で生活することによって、生活上のルールや風習やしきたり等を学び、ともに実践していく。「歴史文化の担い手」としての自己や「社会の構成員」としての自分の役割を意識することにつながる「地域教育」の中で、現代の学生が実社会に出て行くに必要な「ライフスキル」の獲得を促進する。

３．本プログラムの趣旨・目的

公共心やモラル、社会や組織への適合力の欠損等、若者を取り巻く現代の社会的課題の多くは、異世代の共存する「地域社会との関わり」や「地域生活」の不足によるものであるとも考えられる。少子化や核家族化、父性の不在や居住空間と生活スタイルの変化等により、「異なった年齢構成で多様な人間関係を構築してきた経験値」が少ない世代とも言える学生たちを町の諸活動の中に誘導し、様々なジェネレーションを含む地域社会と関与させることが、社会性や人間性の成長のためにも重要であると考えている。

もともと本学では、学生の徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、知育だけでなく人間力そのものを磨く「良心教育」を心がけてきている。他方で、2000（平成12）年文部省高等教育局からの報告にもあるように、大学は総じて「社会の中で生き抜く為の学生の総合的な能力（決断力、行動力、協調性、意志伝達能力等……）の涵養」に努めることが求められてきている。

本学では、いち早く「課外活動」や「学生生活」のもたらす人格陶冶の意義を考え、既存の団体支援に留まらない人や知恵の介在する支援体制の確立と、団体には属さない一般学生に向けた多岐にわたる課外教育プログラムを展開してきた。いずれも人との関わりの中での成長という観点にウェイトをおいた取組であったと言えるが、本企画はその方向性の延長線上にあり、本学における学生支援の一つの集大成の形として「地域社会」との関わりの中で学生の「ライフスキル」を

高めていくことを期待するものである。

４．本プログラムの独自性（工夫されている内容）

本取組は、「高齢者」「子ども」「学生」という異世代の混交する町の持つ「社会教育機能」に着目し、大学と学生が町に出て町家を借り、地域と連動しながら生活と活動を行うというものである。また、京都市上京区という本学今出川校地の立地する町の「歴史性」「文化・芸能・芸術的資源」「自治的生活力」を中心とした「地域的な特色」を生かした発想となっている（図１）。

例えば上京区は、東は鴨川、西は紙屋川に仕切られた京都市の中心地であり、京都御所や室町幕府跡を有し、平安京以来、中世・近世を通して日本の歴史的展開の中心に位置してきている。また、明治期の番組小学校設立の際からの学区自治が連綿と継承されており、今日でも、住民福祉協議会などを中心に、各種団体が連携して様々な活動が展開されている（図２）。

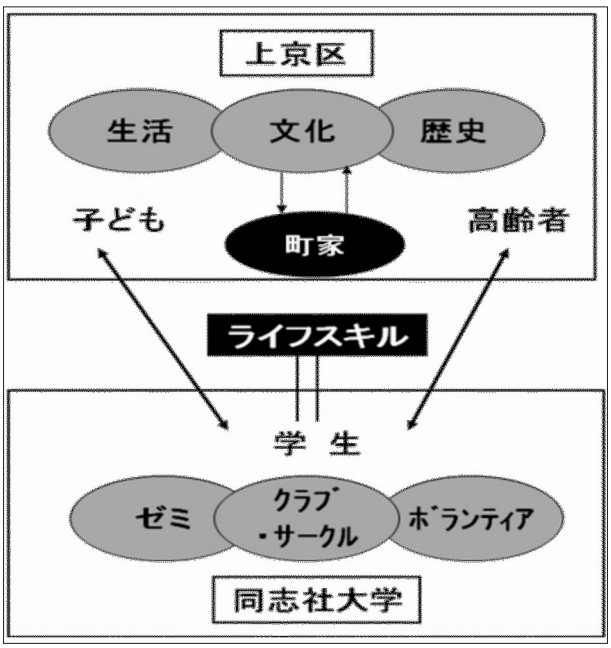


図１　町家の役割と仕組み

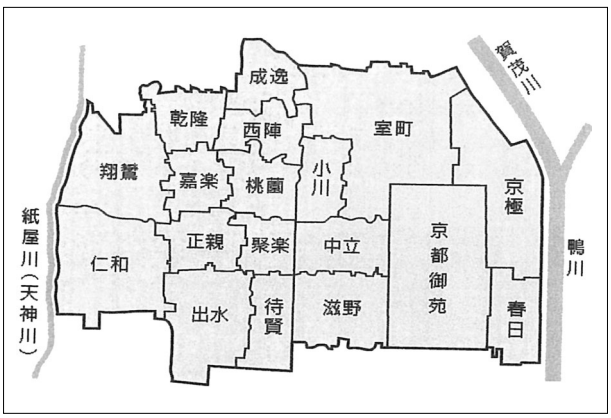


図２　個性ある17の学区（上京区基本計画より）

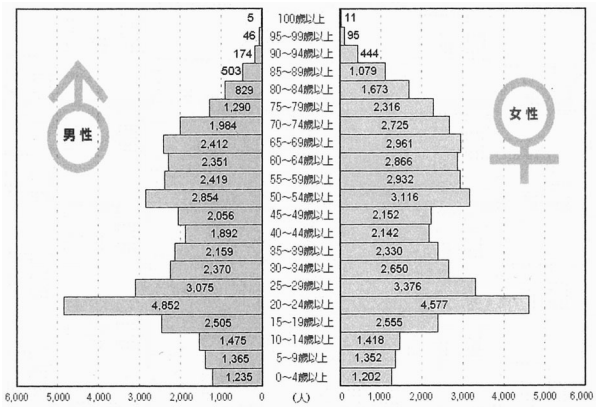
学区ごとに、環境整備、福祉のまちづくり、自主防災、地域振興、生涯学習、都市農村交流など、ほかにはない個性的な取組を打ち出しており、ボランティアの参画や行政の支援を得た活動が活発に進められている。有名な寺社仏閣も多く武家屋敷や公家屋敷を中心とする歴史的側面や、茶の湯の三千家のほか、芸術の薫り高い名所が点在するという文化的側面を有するだけでなく、西陣と呼ばれる伝統産業地域としての側面、あるいは、町内会ごとに様々な「風習」やそれぞれの「地蔵盆」（子どもが主役になる地域行事）があり、地域コミュニティと自治意識の強い庶民の生活地域としての側面をも併わせ持っている。

また、「うなぎの寝床」に例えられる「町家」のまちなみは、上京区の原風景と言える。特に、西陣地域では、機織に適した「織屋建」の建ち並ぶ特徴的な景観が形成されている。しかし、こうした町家の多くは老朽化が進み、居住者も高齢者が多く、改修等が進みにくくなっている。「バブル経済」以降、町家がマンションや建売住宅、駐車場となったものも多く、まちなみ景観や居住環境の面で問題が生じている。そうした中、町家の改修や空き家となった町家のあっせんの取組など、市民主導による町家の活用も進みつつある。

これらはそろって「京都」の町の集約的・典型的特徴であり、世界への発信源ともなる日本文化そのものの象徴であると言っても過言ではない。今回の取組については、正課教育を通した学生による知的・人的な地域貢献や地域研究ということではなく、あくまでも様々な感性との遭遇に満ちた奥行きある町の「地域教育」により学生生活を豊かに構築していくことに着目している点を特徴とする。

上京区は早くから本学が立地しており、もともと「学生」を大事にする風土をもった町であったとも言え、

表１　上京区の人口ピラミッド（上京区基本計画より）
資料：平成12年７月１日現在京都市推計人口



現在では全国的にもまれに見る年齢別人口構成比である（表１）。

にも関わらず、学生が地域生活の中になじんでいるとは言いがたく、上京区の特徴を生かしつつも「地域に関与し、地域に関与された」学生生活を取り戻すということは、スタイルの独自性とは別に21世紀的な学生生活について考える点でも、他大学の学生支援施策や地域社会政策のモデルとなり得ると考えている。

５．本プログラムの有効性（効果）

例えば、下宿や定食屋等で学生が町の人とのつながりを保っていた時代とは異なり、現代の学生の生活実態は「ワンルームマンション」と「コンビニエンスストア」と「友人とのメールのやりとり」が中心になりがちである。

学生にとっては、町に住み、様々な地域社会と関与しながら「先輩」にも「後輩」にも立場を変える経験は重要であり、「文化」を継承していくことや「社会」を構成していくための一員であることへの自覚を促すという意味においても地域による社会教育の有効性は高いと言える。

また、例えば、上京区では「少子高齢化」により、地域の特徴として有してきた豊かな「歴史」「文化」や「しきたり」「習慣」が失われていく傾向を持つが、高齢者とともに生活していくことは、地域福祉のマンパワーということではなく、学生が地域に宿る人々の思いや願いに敬意を持ち、歳月をかけて培われてきた地域文化の意義を汲み取りながら未来に継承していくということでもある。さらに、「学校ボランティア」や「放課後子どもプラン」に代表されるように「地域全体で子どもを育てる」という近年の社会課題においても、権威とはならない年長者・先輩としての「学生」の存在は重要であり、需要が高い。

つまり、「高齢者」「子ども」「学生」の組み合わせの中で、地域財産を受け継いでいくことは、地域ニーズにも適合し、新しい学生街としてコミュニティの教育力を再構築していくという効果が期待できるものである（図３）。

本学ではもともと学生支援に対する観点を「団体支援」（クラブ・サークル等に属する学生）と「個人支援」（クラブ・サークル等に関係なく、学生の潜在的なニーズに対するケアと支援）に分けて考え複合的な支援を行っているが、本取組はその双方に影響を与えると思われる。

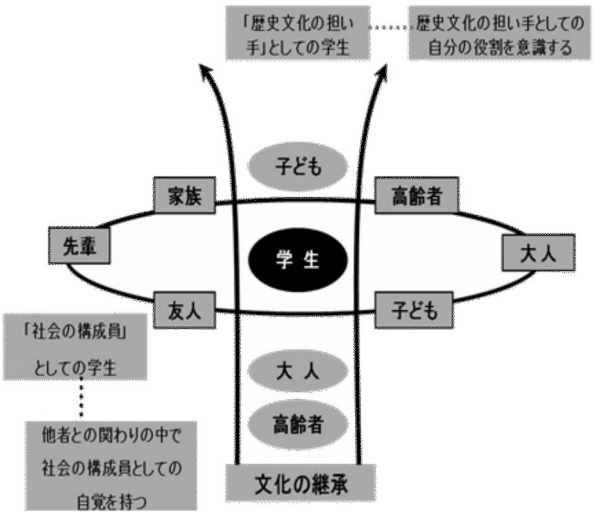
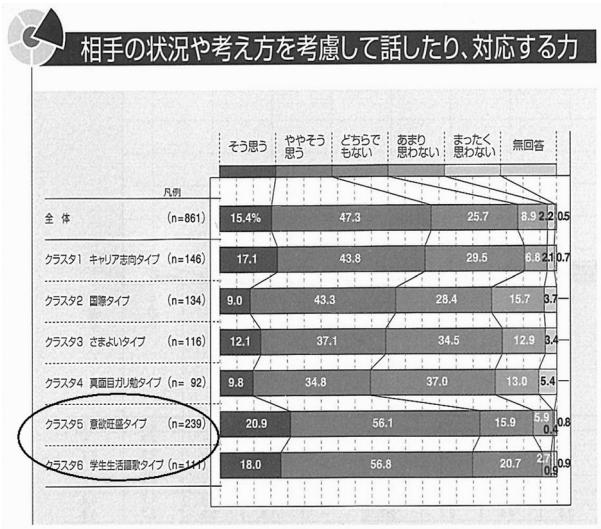


図３　社会の構成員としての学生
文化の担い手としての学生

町家を中心にした「子どもから大人までのサークル活動の展開」には、本学の既存のクラブ・サークルがスキルを生かして活躍することになるが、クラブ・サークル活動の活性化による人間的成長の効果は明確であるのに（表２）、それぞれが「内輪で閉じた活動」に向かいがちなことが近年の最大のウィークポイントでもあった。

表２　学生ニーズのクラスター分析2006より
（本学学生支援センター実施）



本学学生を６つの特徴的なクラスター（層）に分類し分析した結果、クラブ・サークル活動などの課外活動に最も熱心に取り組んでいる「学生生活謳歌タイプ」と「意欲旺盛タイプ」で際立って高く「相手の状況を考慮して話したり、対応する力が身に付いた」ことがうかがえる。

本学の文化系クラブ・サークルの支援は、すでに補助金や施設の貸与だけではなく、専門的情報の提供や教職員の積極的関与、人間関係ネットワークの構築に繋がる環境作りやアドバイスという段階に移行しているが、学生団体のスキルを使った地域や他者への関与は、課外活動の教育的効果を期待した支援の一環に確立し得る。発表の場や人との関わりを欲しているのにノウハウを有しない学生のニーズとも合致し（表３、４）、自己満足的な達成感に留まらず、教える難しさ、評価・批評される緊張感と喜びというものが文化系クラブ・サークルの発展に跳ね返ってくると考えられる。

また、本学では学生の成長・発達段階を意識した様々な課外プログラムを展開しているが、本取組により「高齢者や子供」等の地域生活者と関わりながら、自己の可能性に気付いた学生による次段階のプログラム展開が考えられる。つまり、大人や大学のアドバイスを受けながらの取組から学生自らが創意工夫する新たな取組へと派生したり、各種学生スタッフ等へ登用されることにより、既存の課外プログラムの活性化と立体化につながるだけでなく、リーダーシップや意思決定の手法を磨くことによって、旧来より学友団主体で行われてきた学園祭等のプロジェクト内容・手法に関しても効果が及ぶと考えている。

このように学生が地域社会の異世代と協同しながら伝統的な諸相に関わることは人間的総合力の形成に寄与する教育効果があると考えられる。

取組全体はボランティア等による「サービスラーニング」の手法の援用と言え、他者と出会い様々な立場の人がいることを知る（想像する）こと、他者と自分を結んでいく中で社会的課題を知る（気付く）こと、社会から自分に跳ね返ってくるものを検証できる（実感を得る）ことを中心的課題とするが、様々な体験の中から「歴史文化の担い手」「社会の構成員」としての学生自身の役割を意識し、現代社会に必要な「ライフスキル」（表５）の獲得につなげたい。

また、これらのことは「自ら気付き発見する」という喜びや「自ら積極的に学ぶ」という自立の精神の涵養ともなり、知識や結果を得ることで満足するのではなく、知識をどのようなことに使い、成果をどのように社会に役立てていくのかということを重視する本学の「教育・研究」での取組においても相乗的な効果を期待できるものである。

表３「第12回学生生活実態調査」本学独自設問より

同志社大学で「こんなことができるといいな」「（もっと）こういうサービスがあれば良いのに」と思うもの

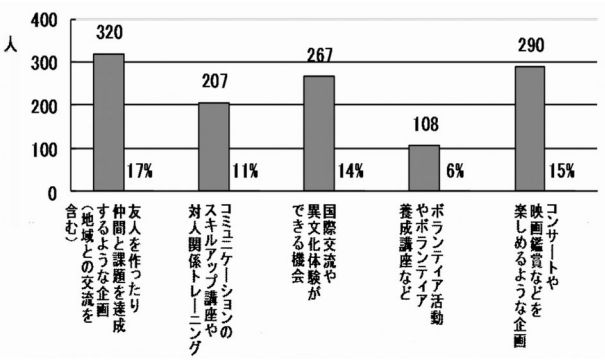


表４　寒梅館夏まつり（子ども300人参加）ボランティアスタッフ（100人）アンケートより

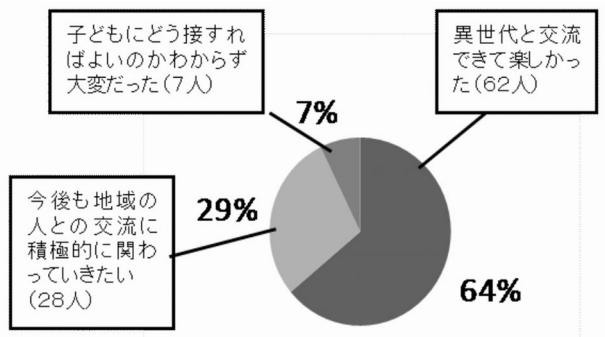


表５　ライフスキル（世界保健機構（WHO）より）

自己認識／共感性／効果的コミュニケーションスキル／対人関係スキル／意志決定スキル／問題解決スキル／創造的思考／批判的思考／感情対処／ストレス対処

６．本プログラムの改善・評価

学生支援に関する全般的事項については学部学生主任が一同に会する「学生主任懇談会」が所管しているが、現在、クラブ・サークルのみならずボランティア活動や学生の文化活動を体系的に支援し諸問題を検討する全学的委員会として「文化活動支援委員会（仮称）」を設置準備中であり、本取組についてはその中に支援体制を作り、全学的にフィードバックしていきたい。

実施後は、参加者と地域の方々からの直接のヒアリング（懇談会・反省会）をするほか、年度ごとのプロジェクトについては出版という形態を通して社会的に公開する予定である。また、課外プログラムで利用し

ている「Evaluation Form」（参加者が項目ごとの満足度や達成度を数値で表記する）を通して、本取組の目的である学生の「ライフスキルの獲得」という観点から項目を設定し、その到達度を中心に数値的に把握して評価を行いたい。

「文化活動支援委員会（仮称）」での総合的な事業総括の後は、「教育開発センター」での報告を踏まえて、成果をフィールドワークや実習を中心としたプロセス重視の授業等につなげていくほか、異世代との協同教育として「小学校と大学の連携の可能性」について附属小学校とも協議を重ねていきたい。さらには、2013（平成25）年に文系学部が今出川校地に全面移転するために「文系学部今出川統合移転に伴う学生サービス整備検討部会」を設置しているが、学生の居住環境や福利厚生施設面での地域連携や大学と地域が共存する新しい環境整備の中で本取組の成果や課題が十分に活用される予定である。

7．本プログラムの実施計画・将来性

2007（平成19）年度

学生支援センター内にコーディネーターを置くとともに、コアの学生チームを結成し、町内会等での協議・相談を経た上で、学生が町家に生活し、ゴミ出し、清掃・防犯当番、回覧板、町内会議、地蔵盆・秋祭り・運動会等の地域行事等にも段階的に参加しながら、下記の取組運営を行う。

〈町家での継続事業〉

・町家サークル

上京区の市民や、クラブ・サークル、留学生、障がい学生を含めた学生が講師を務めながら「子ども」「学生」「高齢者（大人）」がともに参加するサークルを運営する。

〔例〕邦楽、伝統芸能、京都研究、英語、手話・点字、地球環境研究、演劇、合唱等。

・井戸端会議

「学生（中高生も含む）」と「大人」とが膝をつき合わせながら、様々な判断や考え方があり得る身近な問題や時事問題について、一定のルールと方式の中で議論を行う。

〔例〕赤ちゃんポスト、スポーツ特待生、地球温暖化問題、喫煙問題、路面電車等。

・季節のイベント

「6月には水無月（京菓子）を食べる･･･」、というような今は途絶えかけている季節や毎月の生活上の習慣について学び、大人や子どもたちとともに実践していく。

〈各年度のプロジェクト〉

2008（平成20）年度

・面白地図を作ろう

上京区（京都市）と連携して、本学学生のプロジェクトチームを結成。歴史、文化、生活、産業からみた上京区情報を分析し、様々な地図を作成する。

〔例〕職人マップ、お地蔵様マップ、織機所在地マップ、老舗マップ、井戸マップ、縁台マップ等。

・行事や風習を集めて面白カレンダーを作ろう

同プロジェクトチームにより、町内会の伝統行事や風習等を調べるとともに、コミュニティの果たしてきた役割を研究する。また学生が現代社会の中で地域生活をしていくときに守るべきマナーや公共心についての心得をまとめ、本にして出版。

2009（平成21）年度

・京都のわらべ歌を集めて子どもたちに教えよう

京都に伝わる「わらべ歌」や「あそび歌」をお年寄りや研究者から聞き取り、遊び方も含めて子どもたちに教える。また、小学校や京都の作曲家等との協力により、現在の町事情に合った新しいあそび歌を作りCD付きブックとして出版。

・京都の伝統産業を現代生活の中に生かそう

西陣を中心とした京都の伝統産業に関わりながら、引き継がれてきたものと生活の中への息づき方を学ぶ。現代的な生活との関わりの中から再検証し、現代生活の中に生かしていくための新商品開発を行う。

2010（平成22）年度

・上京カルチェラタンを世界に発信しよう

町の持つ社会教育機能と地域における大学のあり方を考え、異世代が有機的連関の中で生活・活動する上京区の仕組みを世界に発信するための手段を考える。グローバル時代の日本社会の市民性や社会性についてシンポジウム等による情報発信を行う。

本学「今出川校地学生支援課」では、2004（平成16）年に竣工した「寒梅館」（学生会館をリニューアル）を拠点に、課外活動と地域との協同事業を展開し始めている。「寒梅館」は大小の本格的ホールだけでなく、会議室、アトリウム、ギャラリー、和室からレストラン、喫茶までをも兼ね備えているが、ハード面の充実だけではなく特徴的なのは、その機能を生かしながら「学生と小学生」や「学生と一般の方々」が混合した独自プログラムをすでに多数手がけている点である。

学生による寒梅館及び周囲の情報を集めた情報誌作成や、学生によるホール運営、友の会制度を設け、すでに2,000人以上の方が学生や学生支援センター行事のサポーターとなっておられる等、新しい取組の中での文化・社会プロジェクトやコーディネートに関するノウハウを十分にストックしていると言える。

地域連携についてはほかにも「リエゾンオフィス」「社会科学系のゼミ」等が個別多面的に行っている状況であるが、本年度中に学生支援センターを再編し「地域連携室」を設置予定である。すでに大学院総合政策科学研究科が研究拠点としての町家を保持したり、本学が上京歴史探訪館の運営協力を行っていること等からも、行政やNPO等とも連携しながら地域に対する起点作りは十分に進んでおり、さらなる整備とダイナミックな展開のための機が熟しているとも言える。

補助期間終了後もプロジェクトや評価体制は保持し、先述の通り2013（平成25）年の今出川校地への文系学部全面移転に合わせる形で、交通整備や商店街整備等の都市計画にも学生生活の立場から関与しながら、21世紀型のカルチェラタンの実現に向けて努力していきたい。

選定理由

本取組は、町家というキャンパスの地の利を活用した京都ならではの取組であり、歴史的な蓄積のある伝統的空間の中で、様々な立場や異年齢の人々との協同・交流を行うことで人間力を付けさせるという興味深い活動で、意欲的な学生を育てるサークル活動に対する効果的な支援策です。

特に、学生の自主性の育成のための計画が細部まで十分に綿密に検討され準備されていること、また、今後は授業・演習など全員参加型での活用についても計画可能であることなどの点を考慮すれば、大学集積地、文化の中心地といったキャンパス立地というメリットを持たない他の地域の大学でもそうした工夫を通して参考となる要素を発見することが可能な取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。